

フォルトウナ号

1

陽が落ちてゆく。

アル・マクダエルはフォルトウナ号のリクライニングシートに深く身を沈めると、白髪まじりの頭を窓枠にもたせかけた。

夕陽は疲れを知らぬコークスのように赤々と燃え、落ちてなお鮮烈な光を投げかける。

それはまた世界屈指の特殊鋼メーカー『MIG』の長として、火のように駆け抜けてきたアル・マクダエルの最後の輝きでもあった。

UST歴ユニバーサルスタンダードタイム（世界標準時間）、二〇〇年八月二十五日。

宇宙船《フォルトウナ号》は巡航高度に達すると、銀色の両翼を広げ、黄昏の空を大きく旋回した。

有翼の女神のように優美なフォルムと最新の恒星間

航行システムを備えたフォルトウナ号は、MIGミグ（マクダエル・インダストリアル・グループ）の創業者一族が代々所有するプライベートジェットだ。その推進装置には、宇宙文明の根幹をなす新元素《ニムロディウム》がふんだんに使われ、MIGの卓越した技術を象徴する。

銀色の機体には、苛烈な宇宙開発競争を生き抜いてきたマクダエル家の家訓『Fores fortuna adiuvatフォレス・フォルティナ・アディヴァト』（運は勇敢な者たちを助ける）¹』と刻まれ、受難の戦士に福音を告げる。

だが、伸るか反るかは己次第。機会は与えても、勝利は約束せぬ。この世に幸運も不運もなく、運命はただ試すだけだ。

そして現在、フォルトウナ号を所有するのは、MIGインダストリアル社の最高経営責任者にして、稀代の事業家と名高いアル・マクダエルだ。

この五月で六十歳の誕生日を迎えたアルは、人懐こそうな黒い瞳が印象的な紳士だ。顔は丸く、眉は八字に垂れ下がりがり、タヌキのようにとぼけた風貌は厳しい交渉の場でも変わることはない。

祖父ノア・マクダエルが興した特殊鋼メーカー『M

「I G インダストリアル社」を三十五歳の若さで引き継ぎ、五歳年上の姉ダナ・マクダエルと共にグループを統率してきた。指導力もさることながら、企画、戦略、管理、実践、あらゆる面で卓越し、ぼんくらとした世襲社長のイメージからは程遠い。就任以来、一度も赤字を経験したことがなく、ライバル企業でさえその手腕に一目置くほどだ。

二十年前には長年の研究開発の成果であるニムロイド新合金「N M i N u」を市場に送り出し、M I G インダストリアル社を世界で五指に入る特殊鋼メーカーに押し上げた。今やM I G の関連企業は六十社を超え、その市場は宇宙植民地の隅々まで広がっている。

だが、アルにとって世間の賞賛は無意味だ。

その目は常に海の星アステリアに注がれている。

水深三〇〇メートルの深海底に広がる海台クラスト。そこに含まれるニムロディウムこそ世界を変える。N M i N u の成功も、経営者としての名声も、全てはこれを探掘する為の手段に過ぎない。絶対不可能と言われた海底鉱物資源の探掘を成し遂げて初めて、アルの人生も報われる。

「悪をもて悪に報いず、凡ての人のまえに善からんこ

とをはかり、汝らの為し得る限りつとめて凡ての人と相和らげ。愛する者よ、自ら復讐すな。ただ神の怒りに任せまつれ。録して主いい給う、復讐するは我にあり、我これに報いん」の言葉通りに。

二世紀前。Anno Domini (西暦)の末期。

みなみのうお座に向けて打ち上げられた無人惑星探査機パイシーズが、『ネンプロット』と呼ばれる赤茶けた惑星から一つの鉱石を持ち帰った。程なく未知の金属元素が検出され、発見場所のニムロデ平原にちなんで『ニムロディウム』と名付けられた。

ニムロディウムは、鉄や銅といったコモンメタルに微量に添加すると、有害な宇宙線の遮蔽能力が格段に向上することから、それまで絶対不可能と言われた恒星間航行の推進装置や居住施設スェルビコロトの建造が可能になり、宇宙進出の気運も一気に高まった。

これを機に、惑星ネンプロットの鉱物資源開発に乗り出したのが多国籍企業グループ「トリアド・ユニオン」だ。代表会議の場に幾つもの三色旗が並んだことから、当初は「トリコロール・ユニオン」と呼ばれて

いたが、出資者の増加に伴い、「トリアド・ユニオン」に名称を改めた。そのシンボルは、聖なる力とバランスを表す三叉矛^{トライデント}である。

トリアド・ユニオンの他にも、幾多の企業がネンプロット進出を目論んだが、トリアド・ユニオンに決定的な優位をもたらしたのが《ニムロデ鉱山》の発見だ。

ニムロデ鉱山は、惑星ネンプロットの赤道直下に位置する底面積一六〇万平方キロメートルの巨大な楕状火山だ。数億年にわたって、幾度となく噴火を繰り返し、山頂のカルデラは長径八〇キロメートル、標高は二万五千メートルに及ぶ。

椀状に広がる山体の地下には、ニムロデイウム含有率三〇パーセントを超える《ニムロイド鉱石》の大鉱床が広がり、一攫千金を狙う採鉱者が次々に乗り込んだが、アダマント³のような岩盤に阻まれ、採掘は困難を極めた。

あまたの業者がつるはしを折る中、当時はまだ高級鋼材だったニムロイド合金のドリルビットを駆使して強固な岩盤を掘り抜き、地下の大鉱床をいち早く手中に収めたのが、トリアド・ユニオン傘下の鉱山会社《ファルコン・マイニング社》だ。

ファルコン・マイニング社は、宇宙鉱業法が改定される以前の『先願主義』に乗じて、ニムロデ鉱山の鉱業権を取得すると、瞬く間にニムロデイウム市場を独占し、採鉱から販売に至るまで、絶対的な影響力を持つようになった。

また系列会社であるファルコン・スチール社がニムロデ鉱山の近くに新工場を建設し、ニムロイド合金の大量生産が可能になると、宇宙航空、建設、恒星間通信など、宇宙文明を支える技術も著しく向上し、本格的な宇宙植民時代が幕開けた。

これを機にU S T歴（世界標準時間）が導入され、人類は宇宙に向かって爆発的に領土を広げたのである。

2

今、アルの眼下には、繁栄を極める《惑星トリヴィア》の工業地帯が銀のパノラマのように広がっている。約二〇〇キロメートルに及ぶ広大なベルト地帯には、最新のエコシステムを取り入れた製鉄所、化学プラント、組み立て工場などが建ち並び、世界中に工業製品を送り出している。

トリヴィアは、ネンプロット開発に伴って開けた、世界最大の宇宙植民地だ。政治的には『自治領』に区分され、二院制からなる高度な自治を行っている。

みなみのうお座星域を表す《P.A.S第6恒星系》の第3軌道を周回し、直径は約一万キロメートル。都市部の大半は東半球の中緯度に集中し、地熱ジェネレーターが作動する総面積約二万平方キロメートルの領内に八〇〇〇万人が暮らしている。

大気の安定した岩石型惑星で、多くの宇宙航路が行き交う利便性を活かし、U.S.T歴元年、貿易中継基地として開かれた。名前の由来はラテン語の『三叉路』だが、暗に開発を主導したトリアド・ユニオンを指すと言われている。

開発当初は、輸送、修理、補給、宿泊といったサービス業が中心だったが、産業基盤の整備が進み、オフィスビルや工場が次々に建設されると、世界の工業基地としての役割を一手に担うようになった。以後、一世紀半にわたり、高品質な工業製品や工業用原料を輸出し、今では《ステラマリス》と呼ばれる人類の母星をはるかに凌ぐ生産力を誇っている。

M.I.Gの前進である『マクダエル特殊鋼』がファル

コン・スチール社と提携してトリヴィアに進出したのはU.S.T歴四〇年代だ。

元々は合金設計を得意とする中堅の特殊鋼メーカーだったが、卓越した技術を見込まれ、ファルコン・スチール社と共同でニムロイド合金の製造に携わるようになった。ファルコン・スチール社が高品質なニムロイド合金の大量生産を可能にしたのも、ひとえにマクダエル特殊鋼のお陰である。

U.S.T歴九〇年、トリヴィアが自治権を獲得し、同じ《P.A.S第6恒星系》の第4軌道を周回する惑星ネンプロットが『属領』として取り込まれると、ファルコン・マイニング社は政財界の中枢にいつそう深く入り込み、鉱業行政のみならず、経済政策、外交、メディア、労働問題や文化芸能に到るまで隠然たる影響力を持つようになった。その結果、ニムロディウムはもちろん、その他の金属資源までもがファルコン・マイニング社を頂点とする企業連合の支配下におかれ、価格、販売、生産量、輸送経路、全てにおいてマイニング社の意向に左右されるようになった。

わけても産業界に多大な影響を及ぼしているのは、ハイテク産業のエッセンスともいべきレアメタル

(希少金属)だ。レアメタルは、鉄、銅、亜鉛といったコモンメタルに微量に添加することで、耐熱性、耐食性、強磁性、超伝導性といった金属性能を高め、新素材や技術開発の鍵となる物質である。

だが「産出する場所がきわめて限定されている」「純金のように元々の埋蔵量が少ない」「純度の高い金属成分の抽出が非常に難しく、複雑な精錬プロセスを必要とする」といった理由から生産者も限定され、その安定供給には常に政治問題がつきまとう。

とりわけ良質なニムロディウム鉱石はファルコン・マイニング社に抑えられ、生産量も市場価格も意のままだ。トリヴィア政府も鉱業局の権限を強化し、ファルコン・マイニング社の寡占に対抗しようとしたが、鉱業局の高官までが収賄に手を染め、業界の浄化には至らない。

価値観の違いからファルコン・スチール社と袂を分かち、独自路線を歩み始めたマクダエル特殊鋼も、ファルコン・マイニング社にニムロディウムの原価を一方的に吊り上げられたり、ファルコン・スチール社に鉄スクラップの供給を幾度となく止められ、お預けを食らう犬のように翻弄されてきた。

かといってニムロディウムの採掘には地下深く掘削するノウハウが不可欠で、何の実績もない企業が真似できるほど容易くもない。誰もがファルコン・マイニング社に強い不満を抱きながらも、正面から「NO」を突きつけることができないのは、彼らが図体だけでなく、世界屈指の採掘技術と生産力を誇っているからだ。

そんな中、U S T 歴九十二年から九十三年にかけて、ファルコン・マイニング社の劣悪な労働環境に反発し、労働組合が鉱山や製錬所で大規模なストライキを決定した。この運動は長期化した上に、暴徒が工場や倉庫に放火して、輸送システムを麻痺させた為、ニムロディウムのみならず、他の金属資源の供給にも著しい支障をきたした。

その後、労働者の賃上げや福利厚生充実、鉱業法の見直しや監督機関の強化といった抜本的な施策が行われ、とりあえず事態は沈静化した。だが、ファルコン・マイニング社の一党支配は依然として変わらない。

ニムロディウムに依存する政治経済の基盤の脆さを改めて認識したトリヴィア政府は、九十三年半ばより自主採鉱政策の一環として惑星探査を開始し、九十五年、

PAS第9恒星系の第3軌道にテラフォーミング可能な惑星を発見した。惑星表面積の実に九十七パーセントが海洋で覆われた水の惑星だ。

この海洋惑星は、ギリシャ語で『星の島』を意味する《アステリア》と名付けられ、人工衛星と無人機による精査が開始された。

海水にはニムロディウムをはじめ、マンガン、コバルト、ニッケル、リチウム、ウラン、金、銀、レニウムなど、様々な金属元素が溶け込み、海底の泥や岩石にも大量に堆積していたが、それを採掘するのは決して容易ではない。

理由の一つは、海洋に関する知識、技術、人材の圧倒的な不足である。

ニムロディウムの実用化により、人類は爆発的な勢いで宇宙に進出したが、海は置き去りにされた。金属容器も押し潰す深海の超高压。強力なライトを用いても視界十メートル程しか照らせない絶対的な闇。電気も電波も届かない水の世界が技術の前に立ちほだかり、研究は遅々として進まない。

海底地形を精査するにも、数十名の乗組員を組織して調査船を都合し、水中機器のオペレーターや整備士、

音響測深や音波探査のエキスパートなどを総動員せねばならず、同じ一平方キロメートルでも、地上と深海では掛かる経費も手間も桁違いだ。

また、ステラマリスでは環境保護が強く叫ばれ、産業界がより自由で実利に満ちた宇宙開発にベクトルを向けた理由も大きい。やがて海洋科学に投入される予算も、学問自体も縮小し、水中音響学や船舶工学など特殊技能を有する人材も激減した。

それに加えて、商業的に採算の取れる海底鉱物資源の採掘システムは未だ確立されていない。

この数世紀、海に眠る未曾有の鉱物資源を採掘する為に、国や企業がこぞって研究に取り組んできたが、水深数千メートルの海底から有用な鉱物資源だけを効率よく揚収する技術の開発は困難を極めた。

まず正確な埋蔵量を把握する為の海洋探査が、陸上の鉱物探査に比べて難度が高く、一つの海域を調べただけでも莫大な予算と手間を必要とする。地上の鉱山であれば、観測衛星や無人飛行機を使って、地表面の様子をつぶさに観察できるが、超高压と暗闇に閉ざされた深海では海底地形を把握するだけでも一苦労だ。水中機器の開発費だけでも馬鹿にならず、それを支え

る人材も年々減少している。

アンノドミニ (Anno Domini) (西暦) の後期には幾通りかの採鉱システムも考案され、プロトタイプによる試験採掘も行われたが、安全で効率的な手法を確立するには至らなかった。

また回収した破砕物から商業的価値のある金属成分を抽出・加工する技術も未完成であり、どれほど埋蔵量が莫大でも、陸上の鉱山業をはるかに凌ぐ経済効率を達成できなければ、海底資源の有用性はきわめて低いと言わざるを得ない。

結局、海底鉱物資源の採掘に必要な何十億もの初期投資と、その維持管理に必要な経費を考慮すれば、ネンプロットをはじめとする資源供給地との外交を強化し、技術協力や資金援助を通じて間接的な採鉱政策をとる方がより現実的との判断から、トリヴィア政府はアステリアの海洋開発を断念した。

そして、発見から一世紀以上経った今も、未曾有の海底鉱物資源は誰の手にも渡ることなく、水深数千メートルの海底で深く静かに眠り続けている。

もし、それを掘り起こせる人間がいるとしたら、アル・マクダエルを置いて他になかった。

3

アルがMIGインダストリアル社を継いだのは一七五年のことだ。父のヨシユアが七十歳で病に倒れた為、アルが三十五歳で社長に就任、五歳年上の姉ダナがMIG執行委員会の会長に就任した。だが、アルに跡取りとしての帝王学を叩き込んだのは、父よりも祖父ノア・マクダエルである。

この「厳めしいお祖父さん」は、MIG会長兼インダストリアル社の社長として西に東に飛び回る多忙な父に代わり、やれ読書だ、化学だばばだと、孫二人の英才教育に傾注した。

祖父はアララト山の仙人みたいに面痩せ、膝が痛むと杖を突くようになってからは、ますます浮き世離れして見えた。若い頃は大変な美男子だったが、ファルコン・スチール社やファルコン・マイニング社と火花を散らすうちに、甘やかなマスクは鉄火のように険しくなり、豊かな金髪は四十半ばで真っ白になった。子供たちには優しくだったが、掃除をさぼったり、勉強を手抜きすると「お仕置き部屋」に入れられ、難しい本